

『レンチョン（短剣）』に描かれるアチエー暴力論

セノ・グミラ・アジダルマ／森山幹弘訳

ハムサッド・ランクティ(1)の短編『レンチョン（短剣）』は一九九八年九月二九日、日曜日の日刊紙コンパスに掲載された。その題名ゆえに、この短編はすぐさま近年のインドネシアの政治地図の文脈におかれてしまう。それはアチエ(2)の騒乱を連想させるからである。

仮に一九九八年五月二一日のスハルト退陣をひとつの指標、あるいは前改革期と改革期の公式の分岐点とするならば、ハムサッドの短編は改革期——しばしば自由の時代と言われる——に発表されたということになる。しかしながら改革の時代とは、一体どれほど自由に思考することを可能としたのだろうか。もちろん改革の時代には以前より自由に意見が表明できるようになった、しかし、同時に人々はより自由にテロ（威嚇）を行い得るようになったのである。

アチエの問題は古い。例えば「自由アチエ運動」は、分離運動と一般的には呼ばれているが、かくも長きにわたってアチエで軍事行動が行われたにもかかわらず、決して消し去ることができないさまざまなのごとく絶えることなく現れた。改革後、さまざまな残虐行為の事実が表面化し、実際、抑圧は厳しさを増していた。新たな虐殺の痕跡が何度も発見された。アチエにとって改革期における自由とは無政府状態の戦争でしかなかった。避難民は溢

れ、放置され、そしていつ自分の番かと死の恐怖に悩まされた。

このような背景において、その『レンチョン（短剣）』という題は見事に政治的であった。それはそのアチエ地方独特の武器が長い間抵抗のシンボル、無論それはオランダ植民地主義者に対する抵抗という文脈においてそうであったからである。イブラヒム・アルフィアンはその著作『アッラーの道なる戦い』においてアチエ戦争を一八七三年から一九一二年までと記している。つまり、それは学校の教室で子供たちが暗記させられている一九〇四年よりも後になってやっと終わったということの意味している。オランダ人たちは一七世紀から長きにわたりこの島嶼部を踏みつけてきたにもかかわらずである。アチエの短剣（レンチョン）についての伝説はその教訓の一部なのだ。

『レンチョン（短剣）』はあるホテルに投宿する主人公・私の体験を描く。私はそのホテルの主人と語り合うのだが、それは作者ハムサッドによって「一振りのレンチョンについての言葉のシンボル」と呼ばれる。すぐさまレンチョンは「抵抗のシンボル」であると明示されるのである。奇妙なことに、レンチョンとともにジャワの短剣を表すクリスという言葉が、レンチョンは「アチエのクリス」という言い方のなかで使われる。

その部分を引用すると、「抑圧者を追い払う時に使うインドネシアの二つの民族の抵抗のシンボル」となる。

私は次のように解釈する。アチェの短剣レンチョンは抵抗のシンボルに違いない。現在のインドネシアという文脈においてレンチョンを口にするとき、それは軍事的抑圧に対するアチェ人の抵抗を意味する。しかしながら、ジャワの短剣クリスが「二つの民族」の関係において触れられる時、一方の民族がレンチョンを身につけたアチェだとすると、もちろんもう一方のクリスを持つのはジャワ人ということになる。クリスを持つのがどの民族なのかはつきりと言われないが、このことはある論点を提示している。つまり、もし抑圧されれば反抗するのはアチェ人だけではなく、権力構造においてアプリアリに支配的だと見なされているジャワ人にさえ同じことが起こりうるということである。

ホテルの主人はレンチョンをコレクションとして買えと、いつも客に勧める。売るときには、彼が持つているのは単なる複製だと認めているのだが、レンチョンの伝説についても語るのが常である。それは「長い修行を積んだある鍛冶の専門家の手になるもので」本物そのままに似せて作られたものであり、「これは正に本物と寸分の違いもないもの」だと言う。さらに注目してほしいのは、「本物と複製の違いはレンチョンが持つ不可視の力の違いだ。その所有者の戦いの歴史が本物に入っている中身を授けるのである」と。

このようにして、レンチョンは空しい単なる抵抗のシンボルではなく、中身を持つようになっていく。すなわち、それが歴史のなかで培われてきたアチェの抵抗の精神なのである。レンチョン自身ではなくその意味なのである。いわんや、主人公・私に見せ

られたレンチョン、それはロック・スコンの地のアチェの英雄であつたマット・ルポンのレンチョンの複製であるのだが、そこでは精神的な変容が生じている。「それほどまでに完全に似ているのでそれはもはやどちらが本物のレンチョンか複製か区別がつかない。彼は区別することさえ忘れてしまった」と。

その所有者の闘争の歴史が本物に「入っていった」中身を与えるというならば、もはや本物と区別がなくなつたこのマット・ルポンのレンチョンにさえきつと入っていくのだろう。ところで、その所有者の生涯とはどのようなものだったのだろうか。「マット・ルポンは一八二八年、オランダ兵に銃弾を浴びせられ戦死した。」どうしてなのか。彼が死ぬことになつた日、彼はオランダ軍の指揮官を殺したのだつた。彼のやり方は独特だ。ここから我々はアチェ人の典型的な性格を描くことができるので、やや詳細に引用してみる。

「彼の命が奪われた日、マット・ルポンはモスクの前を通り過ぎる何かを待ちながら、下すべき決断に思いをめぐらして長い間モスクのテラスに座っていた。モスクの前に伸びているアスファルトの道の一方は野営地につながっていた。

野営地とは軍隊のテントが集まつた所で、仮の住宅となつていた。その野営地に暫くの間、オランダ兵が留まつていた。間もなくマット・ルポンはモスクのテラスから立ち上がり、アスファルトの道に向かって歩いていった。その時、日は暑いさかりだった。陰は彼の後を付き従うことなく、裸足の足の裏に張り付いていた。彼の前五〇メートル先、一人のオランダ人指揮官が彼の方、野営地の方向に向かつてたいそ

う慌てて歩いていった。マット・ルポンはさらに近づいてくる彼をじつと見すえた。二人が擦れ違おうとする時、両者は視線を交わさなかった。まさに二人の体が並んだとき、予期しない動作でマット・ルポンは腰に付けたレンチョンを抜きさり、そのオランダ人指揮官の右のわき腹にそれを突き刺した。」

一本のレンチョンに魂を与えると考えられているいかなる精神と歴史が、新しい所有者にもまた魂を与えると期待されているのか、明らかになる。それが次に起こったことである。どうやら主人公の私にそのレンチョンは買われ、芸能の夕べが催されている知事公邸へ持って行かれる。次に注目して欲しい。「その夜の宴で政府の高官と土地の名士たちはたわいのない会話に興じていた。」そしてその時、主人公・私は腹痛を感じ、ある人に彼のレンチョンを預けた後、やむなくトイレへ行く。いかに私がトイレを捜して右往左往したか、出し物がどのように続いたかが長々と語られた後、最後に、「私は、突然、銃の連射音が聞こえてくるまで、どのくらいその個室にいたかわからない。」最初、私はそれを芝居の一場面だと思っていたのだが、やがてそれは自分がレンチョンを預けた男に浴びせられた銃弾だと知るにいたる。後で語られるホテルの主人の話によると、「その男は大広間のテラスまで来ると、レンチョンを抜いた。前列に座っていた三人の政府の高官を刺した。その男は警護に追われ、小銃の弾丸を浴びせられた。」

この場面が意味するのは難しいことではない。「その男に刺された三人の政府の高官が誰なのか明らかにされない」とは言え、あるいはその故に、オランダに対する抵抗の精神は現在の政府に

対する抵抗の精神に引き継がれたのだと言える。しかしながら、そのメッセージを伝えようとするハムサッドの手法は実にユニークである。本物のレンチョン、すなわち英雄譚を持つ短剣、を見つけたと感じているレンチョン売りの言葉を通して語られるからである。「アチエ民族の新たな歴史を刻み込んでいるレンチョンこそが本物なのだ。」

つまり、その殺人事件によって自らの歴史を刻み込んだということは、さっきのレンチョンは複製もしくは、少なくとも本物が複製か区別がつかなくなってしまうものだったのだ。「私は二本の本物のレンチョンを手に入れることになるだろう。」ホテルの主人は再び私にその複製を売りつけようとする。どうやら彼はそれが自分で一度売ったレンチョンだと気付いていないようなのだ。「あなたは二本の複製を手に入れることができますよ。一本は独立を勝ち取った革命の時代のもの、もう一本はその革命の理想を打ち立てる闘争の時代の複製です。」

商売の話が政治的なものに変質してしまう。政府の高官殺害は革命の理想を打ち立てるための闘争の行為なのだ。上の文章はもちろん、独立戦争期の革命の理想がまったく達成されていないということをも意味している。殺人のためにレンチョンが使われるとき、この短編のなかではアチエの闘争の歴史というものとは革命の理想の達成、すなわち独立の奪取をみて初めて誇れるものとなることを意味している。ホテルの主人の言葉は自身がまだ独立していないと感じている人々の態度を代表したものである。だから、最後の段落で「彼の主観的なことばのせいで疲れた」という文章があるが、この「レンチョン(短剣)」という短編は現在のインドネシアの文脈のなかでひとつの政治表

明をなしているのである。

主人公である私のホテルの主人に対する態度、すなわち彼のことを「主観的」と呼んでいることに表れているように、隠されているものの、短編『レンチョン（短剣）』は抵抗の姿勢を表している。その箇所は短編の最後にある。「彼の主観的なことばのせいで疲れたので、私は急いで歩いていった。今、私はホテルの部屋と一杯の温かい飲み物を必要としていた。」つまり、ここでの主人公・私は受動的であり、関わりを持つことなく、むしろレンチョンの持ち主たちの闘争に対して距離さえ置いている。どうであれ、彼はただのホテルの宿泊客にすぎないのではないのか。やがてここを去る一人の旅人にすぎないのではないのかと。この位置づけは、インドネシアの読者にとって想像上の主人公・私と作者としての私が区別されないがゆえに、必要なのである。言い換えるなら、改革における自由という概念は、一人の作家が主張を持つのを擁護することと決して直に結びつくものではないということである。この短編はそのことを示している。

このことは、その短編自らが抑圧に対していかに抵抗するかを表現しているのだと考えると理解できよう。すなわち抵抗は暴力という手段をもつてなされるのである。抵抗のシンボルは、オランダに対してにせよインドネシア政府に対してにせよ、殺人のために使われるレンチョンである。暴力はアチェの問題を解決する手段なのだ。短編自体のなかで、どうして抵抗が暴力によって実行されねばならないのか決して明らかに表現されない、しかし、少なくとも二人の人間がこの短編のなかでレンチョンで人を殺した後、銃弾を浴びて死ぬ。

短編『レンチョン』は暴力に訴えても、抵抗することを勧めているかのように読める。しかし、同時にその短編は暴力は暴力しか生まないのだということも暗示している。それを暗示することは忠告を発することでもある。それ故に、暴力は行使してはいけない。この忠告は、もちろん、暴力を行使しようとす誰に対しても向けられているものである。

この解釈は文学と暴力の関係に触れているアチェの文化的伝統の別の参考文献である『聖戦物語』とはやや異なっている。その物語はアラビア文字を使いアチェ語で書かれた文学作品で、聞き手を前に朗読される形で一六世紀以来読まれ続けてきた。今日でもその朗読は行われている。オランダ植民地主義に対する抵抗の時代には、その物語の朗読は戦意を高めるうえで重要な役割をもっていた。なぜなら、その物語にはイスラームの教えについて、すなわち無信仰者に抵抗して戦うことはイスラームに定められた義務であることが語られているからである。例えば次のとおりである。

「無信仰者が国を占領するとき、我らはみな戦わねばならない、隠れ潜んではならない、国で安穩としていてはならない、その時はファルドゥアイン（個人の義務）を果たすとき、礼拝同様に確信せよ、

いかなるときもそれを果たす義務があることを、

果たさなければそれは大罪となる、

断食の礼拝も完全とならない、もし戦場へ赴かなければ、

貧者も富める者も、老若男女も、

無信仰者に立ち向かうことができる者は、たとえ奴隷であろうと、我らの肩にはファルドゥアイン（個人の義務）がある、

たとえ借金が返せていなくとも、
財産を寄進することは義務なり、戦いに赴く者に対して」

イブラヒム・アルフィアンの『戦いの文学』という書を参照しながら、その続きを引用してみよう。

「女であれ男であれ、みな老いも若きも、
青年も幼児も、合意に基づき参加せよ、
信心・不信心・敬虔・無知であれ、みな戦いに参加せよ、
王も民も兵士も、等しく戦う義務がある、
我らの国を攻める無信仰者あれば、すぐさま立ち向かう義務がある、
逃亡は罪、立ち向かう務めあり、我らにはファルドウアイン（個人の義務）がある」

オランダに抵抗した戦いにおける犠牲者の多くは女と子供だったことを資料は伝える。一九〇四年五月一日、プノサンでは九五人の女、子供が戦死したと記されている。一九〇四年五月八日、タンペンでは五一人の女、子供が戦死。一九〇四年六月四日、クト・レでは二四八人の女、子供が戦死。一九〇四年六月二日、クト・レンガット・バルでは三一六人の女、子供が戦死したと。

一九一二年から一九九九年まで八十七年が経過した。現在のアチエ人は昔のアチエ人と同じであろうか。私はその答えをアチエのことを最もよく知っている人々に委ねよう。しかし、作者不明の『聖戦物語』とハムサッド・ランクテイの『レンチョン（短剣）』には暴力についての姿勢の違いを指摘することができるだろう。

『聖戦物語』では無信仰者に対する暴力による抵抗が明白に肯定されるが、一方、『レンチョン（短剣）』ではそれは勧められていないと解釈できる。なぜなら、何があるうと暴力は暴力しか生みださないものなのだと書かれているからである。しかしながら、『聖戦物語』が次のように肯定的に無信仰者に対する暴力行使に同意を与えるとき、『聖戦物語』と『レンチョン（短剣）』の間には現代的文脈において相関関係が見いだされる。公には、無信仰者とは宗教を持たない者に対する呼称である。その解釈によると、集団殺戮は信仰者の行うことではない。とすると、暴力による抵抗は許されることになる。暴力を肯定する『聖戦物語』と暴力を奨励しない『レンチョン（短剣）』の間には、そのような相関関係、すなわちたとえ両者が同じく暴力行為に対して抵抗するものであっても、この二つの文学は形として相反するものになっているのである。

注

1、ハムサッド・ランクテイはインドネシアの古参の作家の一人である。一九四三年五月七日北スマトラのメダン県ティイクニンに生まれる。六人兄弟の四番目の彼は、幼い頃から重労働に従事し、なかでも母についてルブック・バカムでタバコの葉の害虫取りの仕事に長くたずさわった。家族はしばしば引越したが最後にはキサランに落ち着いた。彼の父親は夜警だった。父親の仕事について行く時、眠気に負けないように幼いハムサッドは父親の物語りに聴き入ったものだった。たぶん語りの技能は後になって私に遺伝したのだろう」と彼は言う。学費がなくハムサッドは高校までしか教育を受けることができなかった。ハムサッドは一九六〇年から短編を書き始める。一九八四年にはジャカルタで催されたインドネシア作家会議（KAWI）の北スマトラ代表となった。一九八五年以来、今日までジャカルタで生計を立てている。現在ハムサッド・ランクテイは文芸誌『ホリソン（地平線）』の編集長を務める。出版されたものには短編集の『結婚の

絵」と「チュマラ」がある。

2、アチエは、正式名をアチエ特別州といい、インドネシア共和国の西の端に位置する五万五三九〇kmの広さをもつ地域である。その州都はバンダ・アチエである。インドネシアの歴史において、アチエは一八七三年から一九〇四年まで続いたオランダ植民地主義に抵抗した戦争で知られ、バンリマ・ポリム、トゥンク・ウマール、チュット・ニャ・ディン、トゥンク・チッ・ディ・ティロなどをはじめとする英雄が有名である。オランダは抵抗を鎮圧するために著名な東洋学者でありイスラーム学者であったスヌーク・ウローニエ(Snook-Hembo)のような専門家を必要とした。彼は、アチエ人の戦争における志気は宗教的な信仰に基づいていると述べた。独立後、七〇年代以降、「自由アチエ運動」によって分離運動が起こり、隠密裡に行われる中央からの軍の派遣を招来してきた。改革後は、この紛争は公然のものとなり、強姦、誘拐、集団殺戮などの人権侵害の証拠が見つかるにつれ世論を喚起した。

セノ・グミラ・アジダルマの紹介

一九五八年、物理学者の父親が研究滞在していたアメリカのボストン市で生まれる。数年後に家族とともに帰国し、ジャワ文化の中心地と言われるジョグジャカルタで、影絵芝居ワヤンの有名なダラン（人形遣い兼語り部）であった祖父の影響を受けながら、一方で父親の英語の蔵書に親しんで育った。創作活動を始めたのは10代の後半で、同時に雑誌記者としても筆をとるようになる。

セノ・グミラ・アジダルマはその代表短編集『目撃者』（一九九四年）によってインドネシアの政治と社会問題、とりわけ東ティモール問題を描く作家として世界に知られるようになった。その短編集は彼の文筆家としての当局に対する抵抗と読める。彼は東ティモールで起こったデリリ事件（一九九一年十一月一二

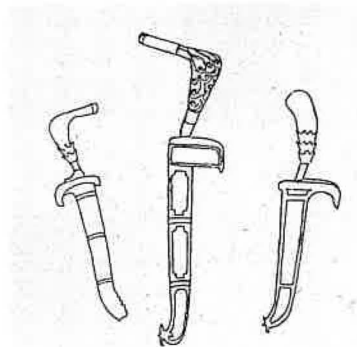
日）の取材記事によってほぼ二年間、記者として沈黙させられた故に、今度は同じ題材を基にして上の短編小説を書いたのである。後に書いたエッセイ集『ジャーナリズムが沈黙させられるとき文学は語らねばならない』（一九九七年）の題に明らかのように、彼は雑誌や新聞の記事として書けないものを文学という形で表現することにその活路を求めたのであった。ただ『目撃者』にしろ同じ題材を扱った『ジャズ、香水そして事件』（一九九六年）にしろ、それらが暗示するものは明らかであり、当時の政治状況のなかでむしろ発禁処分を受けなかったことが奇妙でさえある。ポスト・スハルト体制の急激な「言論の自由」の時代がやってきた時、今回の評論にも見られるように彼はその「自由」について疑問を感じる。今やジャーナリズムは官僚の汚職であれ、学生のデモであれ、地方の反乱であれ、ほぼ当局の検閲なしの状態で書くことができるようになった。情報は無統制に溢れ、次から次へと供給されては捨てられていくが、一方で社会正義や人権にかかわる重要な問題さえも顧みられることがなくなり、毒々しい人目を引くニュースに押し流されていくようになってしまった。例えばそれはアチエに対する中央政府の暴力による抑圧である。セノはこれらの事件の背後に人々の価値観が変わりつつあるアナキーな社会が抱える根深い問題があることを示唆する文学作品を書くようになってきている。

現在、彼は作家であるとともに一度は彼が沈黙させられた雑誌『ジャカルタ・ジャカルタ』の編集長でもある。彼の作品を整理すると、詩集が三冊『死、死、死』（一九七五年）『死んだ赤ん坊』（一九七八年）『ミラ・サトのメモ』（一九七八年）、短

編集では『部屋の中の人』（一九八八年）『神秘の狙撃者』（一九九三年）『目撃者』（一九九四年）『浴室で歌うことを禁じる』（一九九五年）『愛についての一つの質問』（一九九六年）『霧の国』（一九九六年）、先の小説『ジャズ、香水そして事件』（一九九六年）とエッセイ集『ジャーナリズムが沈黙させられるとき文学は語らねばならない』（一九九七年）、そして最新作の短編集『悪魔は死なない』（一九九九年）が単行本として出版されたものである。

彼の作品のうち社会性を帯びたものは常に暴力がその出発点になっている。彼は暴力に異常なまでに感応する。特に、社会で行われる組織的な暴力、集団による個人に対する暴力に感応する。その描写は淡々として直接的でないことが逆に腹の底まで沁みわたる暴力の怖さを感じさせる。一つ目の特徴は強い物語性である。読者を引き込んでいく物語の展開は短編小説作家の中でも群を抜いている。三つ目はある種の乾いた「ユーモア」とも呼べるものである。登場人物の間の衝突は直接的な表現で描かれるものもなく、暴力が目の前で行使されるのではない。しかし読後に残る乾きの感触は悲哀、苦悩、怒り、痛みを心の奥底にまで重く沈める。初期の作品である「部屋の中の人」、東南アジア文学賞を受賞した「浴室で歌うことを禁じる」、そして東ティモール問題を扱った「耳」はこの乾いた「ユーモア」をよく表した作品である。最近の作品はこれらに加えて、戯曲性が強く感じられるようになってきている。セノ・グミラ・アジダルマは現在インドネシアで最も注目されている作家の一人であるが、あまり表舞台に出たがらず、群れを離れてさまよう狼のように孤独な醒めた目で社会を描き続ける作家である。

（森山幹弘／名古屋商科大学助教授）



アチェの短剣「レンチョン」

（Holly S. SMITH: Aceh Art and Culture, OXFORD UNIVERSITY PRESS 1997 より）